

コロナ禍で学ぶ

福岡県 築上町立椎田中学校 2年

出口 真帆（でぐち まほ）

まだまだ新型コロナウイルス感染症が増え続けています。感染者が増えている他に悲しい問題が起きている事をみなさんは知っていますか。それは差別や偏見です。私の母は医療従事者です。職場で様々な話を耳にすることが多いのですが、母自身も発熱外来で心ない言葉を浴びせられることが実際あるそうです。そういう話を聞き、私はコロナ差別をなくすためにはどうしたらいいのか調べ、考えてみることにしました。

「恐れるべきはウイルス。人ではない。」

これは、人権教育啓発推進センターの専務理事であり、日本財団の特別顧問も務める田南立也さんが言っている言葉です。私はこの言葉を聞き、誰が感染してもおかしくない状況の中で感染者や医療従事者の方などを差別することは自分の首を絞めることと同じことなんじゃないかと思いました。また、それと同時にハンセン病について学校で学んだ事を思い出しました。誤った理解で患者さん、回復者さんとその家族に対し、社会からのけ者にする、法律で強制的に隔離するなどといった差別が日本で九十年以上も行われてきたと知りました。日本でこんなにもひどいことがあったと知った時、すごく胸を締めつけられる思いでした。ハンセン病と新型コロナウイルス感染症は単純に比較できないものの、感染症に対する誤った知識や見解が差別や偏見に繋がるということはどちらも共通しているといえます。

新型コロナウイルス感染症に関する誹謗中傷などの差別や偏見の例としては、回復しているのに出社を拒否される、コロナ感染症の患者さんを受け入れている病院で働く親の子供が保育園等の利用を拒否される、感染者個人の名前や行動を特定し、SNS等で公表・非難するなどといった事が報告されています。

今は沢山の人がSNSを活用している時代です。しかし、日々重症患者さんの対応に当たる看護師さんはSNSのアプリを削除する人が増えているそうです。それは、大人数での飲み会や旅行・テーマパークで楽しむ友人達の投稿が緊迫した現場とは全くの別世界で、そのギャップがしんどいからだそうです。また、現場の医療従事者の方を差し置いて様々なデマ、陰謀論、そして医学的に誤っている議論が横行していることも知りました。思った事を世界中の人達に共有できるというのは責任も問うということを再確認しました。そしてこの記事を見て、根拠のない情報に基づく差別や偏見の多くは日常のなかで無自覚になされることが

多いというのに気づきました。新型コロナウイルスに対する正しい知識を持っていないことから、過度に不安や恐れを抱き、過剰な行動をとってしまうこと、これが差別や偏見に繋がっていると感じました。思い込みを避け、正しい情報を確認し、科学的根拠の乏しい過剰な反応は控え、冷静に行動することが大切だと思います。

みなさんは「シトラスリボンプロジェクト」というのを知っていますか。これは誰もが感染のリスクや不安を感じるなか「おかえり」「ただいま」と言いあえる空気や人の輪を広げ、暮らしやすい社会をつくっていこうという運動のことです。コロナ禍で生まれた差別や偏見の存在を知った愛媛県の有志が始めたそうです。また、我が町でもこの運動に賛同しています。こういう活動がある事で思いを形にできるようになってきています。正しい知識と情報をもとに行動することが自分を、家族を守ることに繋がっていくと思います。

ウイルスが発見されて一年以上たった今もなお見えない敵と私達は戦っています。今までの生活も環境も行事なども、全て新型コロナウイルスによって奪われてしまいました。やっぱり悔しいし、怒りも湧きます。でも、いつもの日常がなくなり、当たり前というのがどれだけ幸せだったかを教えてくれたのは新型コロナウイルスではないでしょうか。誹謗中傷などの差別や偏見、多くの問題を目の当たりにした事で、調べ考えるという行動をして、人を思いやる心の大切さも新型コロナウイルスから学びました。ハンセン病での過去の過ちを繰り返さないというのを守り、時代を乗り越えていくのは今だと思います。ここで「繰り返さない」というのを口だけにはしたくありません。こんなに苦しい世の中でも私達は生きています。そしてこんなに苦しい世の中だからこそ人と人とお互いに支えあって乗り越えた時、私達は人間として大きく成長できるのではないのでしょうか。

感染というリスクがある中で終息を願い、最前線で働いてくれる医療従事者の方々、本当にありがとうございます。新型コロナウイルスでの問題に関係のない人はいません。同じ時代を生きる一人一人が自分には何ができるのかを考え、行動して差別のない、人を思う心で溢れる世界を実現させたいです。

